



明治癸酉孟春開彫

1445

杉田玄端譯述

産科寶函

尚古軒藏梓

産科寶函

凡例

一 此書ハ英國倫敦ノ醫士義獨氏ガ撰スル醫學
 八科ノ内第七産科篇ヲ譯スルモノナリ、而シ
 テ其體裁ハ醫學生徒ヲ檢査スルガ為ニ設ケ
 タルモノナレバ其文極メテ約畧ナリト雖モ、
 余去々年以來此書ニ基テ生徒ヲ教導シ且
 實際ニ試ルニ頗ル其要ニ益ヲ得ルヲ鮮
 カラズ故ニ今之ヲシテ國文トナシ産科ヲ
 專業トスルモノニ領メバ止ニ小補ナキニア

HARRY J. GRIFFITHS.



河邊

91-2004

三原和寶函
ラザルベシト之ヲ梓一上ス
一原書ノ刊行ハ丁酉癸卯元一千八百五十九年ニ
在リ實ニ我安政六己未ノニ當ル而シテ全
篇二十條ニ區別シ盡サル所ナシト雖モ只
手術ノ記載ナキヲ遺憾トス余因テ他日好書
ヲ擇ミテ之ヲ鈔譯シ此書ノ附録トナシ嗣テ
上木セントス

明治五壬申歲十月念又三日 杉田擴玄端識

産科寶函

目次

月經及心經血失序 表第一葉
懷孕ノ徵 表第九葉
懷孕中ノ病候 表第十五葉
墮胎及心半産 表第十八葉
懷孕ノ期 表第二十葉
天然ノ出産及心其調攝 表第二十一葉
假痛 表第二十五葉
各部ノ現出 表第二十五葉

目次一
丁酉壬申

發狂	抽搐	出血	品胎	學胎	上肢	下肢	尻殿	難產	頭顱
第二葉	第九葉	第二葉	第二葉	第一葉	現出	現出	現出	第三葉	現出
第五裏	第十裏	第四裏	第四裏	第四裏	第一葉	第一葉	第四裏	第十葉	第六葉
					第四裏	第四裏	第十裏		

產婦熱 第三葉 第五裏
 產婦熱原病 第六葉 第五裏
 亡慮二十條

ヲ發スルナリ、譬ハバ脊液
ノ腫脹及ビ萎縮ルニ或ハ大頭痛及ビ胃ノ
疾患ヲ兼併スルモノ、如シ、然レモ排除機全ク
起ルルハ其症全ク寛解スルニ至ルベシ、
此排泄液ノ性質ニ就テハ生理家者各々其論
説ヲ異ニセリ、或ハ云其液真ノ血ニアラズ線質
リ、バナキニ因リ凝固スベカラズト、或ハ云恐
クハ真ノ血ナルベシ、只腔ヨリ徐々ニ滴出スル
ニ因リ其生氣ヒタルハ脱失シ、且酸性ノ分
泌液ヲ混淆スルノミト、其排泄ノ量ハニオヨリ

六オ若クハ其餘ニ至ルノ差オアリト云、其四週ノ
後再ビ来ルノ原因ハ何故ナリヤ、未ダコレヲ知
ルト能ハズ、醫官ボワ、ハドウ君及ビ醫官リ
イハ之ヲ注意シテ月經ノ将来ニハ往々カ
ラハフハ小胞ノ一個破裂シ且黄體コルハノ
化成ヲ兼併スルノ實驗ヲ得タリト云ヘリ、
經血失序ノ最常有症ハ第一「エマ」ニシオ、
ウハ是月經通ズベキ年齢ニ至ルモ月經通ゼザ
ル症ヲ云、第二「アメン」ノルレ、
メハシウ是月經一回通ハ後閉止スル者ヲ

三十一
力千歳

云、第三「メノル」ヲキ_レ是_レ紅_レ血_レ度ニ過_キテ量多_クナル症ヲ云、第四「ヂス」メノル_レ是_レ經_レ血_レ艱_ニ難_ニシテ疼痛ヲ兼_ヌルモノヲ云、

第一「エマン」シオ_・メ_レシウ_ム即_チ無_レ經_ノ女子_ヲ叙_テ

月_ノ經_ヲ通_スルノ年_ノ齡_ハ九_歳ヨリ二十_歳若_クハ其

餘_ノ差_{アリ}、然_レハ英國_{ナド}ニ於_テハ大_ニ抵_{十五}

歳_ヲ適_中ノ年_ノ齡_ト云_フベシ、

其二_・器_質ノ損_壞卵_巢子宮_等ノ缺_乏ニ因_テ生_ズ、

此_ノ如_キ症_ニ於_テハ其_ノ畢_生婦_人ノ感_情ヲ發_ス

セ_ズシテ又_チ自_ラコ_レヲ治_スル_ト能_ハス、

其三_・月_ノ經_ヲ來_ル頃_ニ方_テ每_月諸_般ノ症_候ヲ發_ス、

然_レハ其_ノ經_血子宮_管ノ閉_塞即_チ腔_口ノ處_ニ女_膜破

開_セザル_ニ因_リ外_部ニ漏_泄セ_{ザル}ナリ、此_ノ症_ニ

於_テハ通常_ノ子宮_腫脹_シテ腫_瘍ノ如_ク黒_色糖_水

ノ如_キ血_ノ量_多ヲ含_メリ、而_シテ腔_{ヨリ}コ_レヲ

檢_査シ_テ此_ノ症_{タル}ヲ確_定ス_{ベシ}、コ_レヲ治_スル

ニハ宜_ク截_開ヲ行_フベシ、

其_四、身_體失_常ノ為_ニ月_ノ經_ヲ通_セザル_{ナリ}、此_ノ症_コ

レヲ二_般ニ區_別ス、曰_ク多_血症_ハ「ヤ_ング」曰_ク虚_弱

症_ハ「ア_ト」是_レナリ、

多血症ニ於テハ女子往々且月滿シテ頬紅ク毎月
 經事ノ將ニ来ラントスル頃ニ方テ頭痛劇シク
 兼ヌルニ嘔氣背痛及ビ股痛ヲ發スレモ曾テ血
 ノ洩出ナク腸中甚ダ刺衝シ易ク食機缺乏シテ
 屢瘵孳ヲ發ス此症久シク治セザル氏ハ必ズ虚
 弱症ニ陥ル切實ナリ
 虚弱症ハ虧血病トシテ一名綠病ト云フト稱
 ス是其顔面綠色淡白色ニシテ膨脹シ蠟色ノ如
 キヲナセバナリ此症体力ノ大缺乏ヲ指斥ス紅
 血甚ダ不足ニテ脣眼舌等甚ダ淡白ニ只明汁ノ

ミ多キガ如ク水腫ニテ兩踝往々陥没スルヲア
 リ食機甚ダ缺乏損壞シテ石灰木灰蠟燭腎脂リサ
 上粉末石版醋磚石ヲ貪食シ毫モ良好ナル食料
 ヲ嗜ムノ念ナク大便ノ通利甚ダ怠慢ナリ此症
 誓留スル氏ハ忽チ喜私シ的里状ノ劇症ヲ起シ尔
 後頭胸腹若クハ關節ニ於テ頑固ノ疼痛陰惡ノ
 嗽衝ヲ起シ以テコレヲ療ズルニ減祛法ヲ行ヘ
 バ必ズ惡症ニ進マシムルナリ
 治法 多血症ニ於テハ緩急ニシテ整然タル峻
 性下劑ヲ用テ誘導シ

得ニ通セントス

ル時ノ如キ諸症アルニテ、
 針ヲ帖シテ大ニ利益アリ、
 虚弱症ニ於テハ宜ク大便ノ通利ヲシテ齋整^セテ
 ラシムベシ、而シテ其最良ノ下劑ハ蘆會ヲ諸般
 ノ形状トナシ用ヰルニアリテ特ニ銅ト配伍ス
 ルヲ最良ナリトナス、又電氣器^{エレキ}ノ震激ヲ孟益ニ
 通流セシメ、效子浴ヲ足部若クハ膝部ニ施シ馬
 ニ乗ラシムル等亦此症ニ良功アリ、食物ハ良性
 ニシテ平穩ナルモノヲ良トシ、阿魏及ヒ滴水浴
^{シヨ}シウグルベ^レ屢能ク神經症及ヒ瘧疾症ヲ寛解ス

ヘシトス、
 第二、「アノンノルレ」即經閉症ハ經血ノ通スル
 時限中恐怖シ若クハ震盪シ胃寒ニ、或ハ微弱ト
 ナル振生ヲ營ムニ因リ發スベシ、此症モ猶「エマ
 シンオ・ノンシウ」^{經無}ノ如ク之ヲ二般ニ區別ス、
 而シテ又同治法ヲ要スルナリ、
 第三、「ノルニギア」即多經症○此症ニ諸種アリ、
 實症「ア」及ヒ癩瘡性「イン」ヲ「ム」ノ者ハ脈跳躍
 「シウ」シ、舌乾燥シテ皮膚、疊熱灼シ、虛症「ハッ」ノ者
 ハ脈虚弱ニシテ皮膚、淡白、冷シ、神經症「ウ」ルホ

ノ者ハ卒尔ニ神経系ヲ擾乱シ、或ハ震盪スル夏物ニ因テ發ス、

此症ニハ必ス大頭痛ヲ兼併スベシ、而シテ此頭痛ハ一異性ニシテ甚ク少年醫輩ヲ迷ハスベシ、是如何ニトナレバ此大頭痛ハ患者ニ大刺絡ヲ施セシ時ニモ亦發シテ恰モ激衝ノ如クナレバナリ、然レモ減祛法ヲ以テ之ヲ療スレバ甚ク惡症ニ進ムベシ、

實症ノ多經ニ於テ患者強壯性ナル片ハ刺絡法塩性下劑及ヒ唵^ア啞^ハ摩^モ呢^ニコレガ主藥タルベシ、而

シテ後ニハ醋酸鉛一匁ニ餽醋ヲ和シ之ニ阿芙蓉液數滴ヲ加ヘ用フベシ、虚症ニ於テハ明礬ニ稀硫酸ヲ加ヘ或ハ裸麦ノ麦奴五匁量宛ヲ用フベシ、神經症ニ於テハ鉛及ヒ阿芙蓉劑ニ兼子テ阿芙蓉製聖藥及ヒ射注劑ヲ用フベシ、何レノ症ニ於ケルモ水平ニ安卧セシムルヲ要シ、又陰處ヲ冒寒セシメザルヲ要ス、
第四、チ^チス^スメ^メノ^ノル^ルレ^レト^ト即^即痛^痛經^經ハ甚シク患者ヲ苦マシメテ經血ノ通ズル時限中劇痛ヲ發スル者ナリ、此症ハ之ヲ三般ニ區別ス、曰ク神經症曰ク

多血症曰ク器様症是ナリ、
 神經症ニハ劇痛アリト雖モ、真炊衝ト名クベキ
 症ナク、又子宮ノ腫脹若クハ變性ヲ兼子ズ、而シ
 テ排世液ノ量及ビ性共ニ一異ニシテ或ハ寡少
 或ハ剩多或ハ淡白或ハ然ラズ、然レモ其最モ顯著
 ナル變性ハ煮沸スルグリスベルリ樹皮ノ如
 キ膜小片ノ混合ナリ、而シテ其多ク發スル所ノ
 症候ハ劇頭痛及ビ吐逆ニシテ其原因ハ諸感情
 經期中ノ冒寒劇甚ナル疲困等ナリ、
 發作中ノ治法ハ口及ビ肛門ヨリ阿芙蓉ヲ用井

ルニ在リ、蓖麻油及ビ阿芙蓉液、温湯浴牛亞牙脂
 ノ啊摩呢化丁幾劑ノ大量及ビ其他ノ諸藥能ク
 疼痛及ビ痙攣ヲ寛解スルニ適當ス、休憩時中ノ
 治法ハ渾身ノ状態ニ準ジテ之ヲ行フベシ、腸胃
 ノ景况ニ注意シテ含鐵液ヲ用井ルヲ概シテ良
 トナスベシ、
 多血症ハ真炊衝性ニシテ子宮頸ノ腫脹スルモ
 ノト思フベシ、而シテ之ヲ療ゼントナラハ宜ク
 其部ニ蟬鍼ヲ帖シ、硼砂、菲沃斯、塩類及ビ輕量ノ
 水銀劑ヲ用フベシ、

器様症ハ子宮口ヲ閉スルノ事縮ヨリ起ルト云蓋
 シ子宮口事縮スレバ通經ヲ障碍スルヲ以テナ
 リ此症ニハ栓塞ヲ用ルヲ緊要トナス
 代經スレハ切リヲ用ル○此症ハ經血通ゼズシ
 テ或ハ胃・鼻孔・直腸若クハ創處ヨリ出血シ之ヲ
 補充スル者ナリ此症ニ行フベキハ只其傍症ヲ
 除治シ務メテ常規ノ排泄機ヲ回復スルニ在ル
 ノミ
 白帶下ルハ常症ハ衰弱ヨリ起リテ腔ヨリ
 粘液ヲ漏泄スル者ナリ而シテ劇甚ナル背痛及

セ弛緩ノ徵ヲ兼併ス此症ハ冷水浴・滴水浴・銅劑
 及セ他ノ強壯藥最好ク之ヲ治スベシ然レ此
 症時トシテハ急性炊衝ノ徵ヲ具シテ淋疾ハ以
 正ト錯誤スルトアリ但シ淋疾ハ色臭共ニ更
 ニ劇症ヲ顯ハスヲ以テ自ラ白帶下ト分別スル
 一ヲ得ベシトス
 白帶下ハ多ク子宮頸ノ炊衝ニ關係シテ其漏泄
 液ハ白色粘膠ニシテ清澄ナリト雖モ時トシテ
 ハ乳汁ノ如ク時トシテハ明汁ノ如ク清澄ニシ
 テ稀薄ナリ子宮鏡ヲ用テ検査スレバ子

産科寶鑑 古車前

今懷孕ニ属スル諸症ヲ檢別スルハ也ヲ二般ニ區別スベシ、曰ク原理症「ハハ」オ曰ク見徵症「セ」ル_シブ是ナリ、原理症トハ子宮自家ノ状態ヲ檢査スル_ル一ナク其婦ノ懷孕タル_ル一ヲ決定スル症状ヲ云ヒ、見徵症トハ直ニ子宮ヲ檢査シテ胎兒實ニ現存スル徵ヲ云ナリ、

原理症ハ第一停經第二早晨ノ嘔氣第三乳房ノ景况第四意氣活潑第五尿及ビ唾液ノ状態異嗜腔ノ変色及ビ渾身ニ某緊切ノ變更ヲ起セル諸症、

見徵症ハ第一腹肚ノ長大第二「バルロツトメ」ト出後ツニト名クル法、第三子宮頸ノ光景、第四胎兒ノ心動ホルルハシルルオフセ、第五胎盤血運ノ音、第六胎兒ノ運動、今其各症ヲ宜ク各別ニ檢点セシトヲ要スベシ、

原理徵〇第一停經ハ婦人身已ニテ懷孕ト信スル者ヲ第一徵トナス、而シテ太都オホ之ヲ真徵トスレ_レ亦欺カル、一往々之アリ、是、如何トナレバ第一懷孕セル婦人ト雖モ、其始メノ二三月間ニハ經血ニ似タル漏泄症之アルヲ以テナリ、第二

疾病ニ因リ經血停止スル者ハ懷孕セザルヲ以テナリ、第三處女未、月經通セザル前ニ方テ懷孕シ、婦人出産後經血再ビ来ラザルニ懷孕スル者之アルヲ以テナリ、

第二、早晨ノ嘔氣○懷孕ノ始、二三月間ハ早晨臥蓐ヨリ起ツ時ニ於テ惡心シ、且、嘔氣ヲ發スル甚ク多シ、此症唯暫時間ナル者アリ、又經久且、劇甚ニシテ大ニ患者ヲ羸瘦セシムル者アリ、或ハ受孕ノ後直ニ發スル者アリ、又五六週間發スルナキ者アリ、通例約スルニ第三月ニ過ムト雖

モ時トシテハ更ニ久シク留連スル者アリ、此症ハ懷孕ノ一良徵トスレド、畜之ノニニ關係スルニ非ズ、其故ハ此症胃ト子宮トノ交感ヨリ生ズルモノナルガ故ニ、懷孕セザル者ニテモ子宮ニ刺衝性ノ諸因アレバ之ヲ發スベキヲ以テナリ、第三、乳房ノ景況○受孕後約スルニ二個月ニ於テ太都乳房ニ生力旺盛ノ徵ヲ現示ス、其徵ハ乳房漸次ニ巨大疣瘡ヲナシテコレニ觸ルレバ疼痛若クハ肉痒ヲ覺ヘ、乳頭周圍ノ輪匝ハ黒色トナリ、小胞過大トナリ、且、少量ノ乳汁漏泄ス、然

レ氏此徴モ亦一向ニ信スルヲ能ハズ其故ハ月
 經通スルノ間ニ於テモ亦乳房長大スルヲコレ
 アルヲ以テナリ乳輪ノ黒色ハ時トシテハ色白
 キ妊婦ニ於テ徴知スベカラズ時トシテハ純然
 タル處女ニコレアルヲアリ而シテ乳汁ノ分泌
 モ亦婦人ノ確徴ニアラズ況ニヤ懷孕ノ徴トナス
 一能ハザルオヤ
 第四意氣活潑○或ハ曰フ此症ハ胎児ノ初動ニ
 因テ起セル一種ノ感覺ナリト或ハ曰フ子宮俄
 ニ盪盪ヨリ腹腔ニ上ルヨリ起ルト但シ其説ハ

甚麼様ナル者ヲ取ルモ敢テ妨ケズ大凡第四月
 若クハ更ニ早ク若クハ更ニ遅ク幽微ニ知覺ス
 ル所ノ一種ノ感覺ナリ然レ氏懷孕ノ徴トシテ
 ハ最モ採用シ難キ者トナス其故ハ衆多ノ婦人能
 ク之ニ欺カレテ懷孕ナラザル時ニ之ヲ知覺ス
 ト相像シ且醫家ニ於テモ此感覺ノ真成ナルヲ
 檢別スルノ方術ナケレバナリ
 第五・懷孕中ハ殆ト全ク尿中ニ乳膏^{カセ}ノ如キ
 一種ノ物質ヲ現ス往昔ヨリ之ニ尿膜^{キハス}ノ
 名ヲ命ジタリ食慾屢一異性ヲナシテ普ク人ノ

知ル如ク異種ノ物ヲ嗜ミ、膀胱ハ通常刺衝性ト
 ナリ、血ハ線質ニ富ミテ其他全身旺盛トナルノ
 諸徴ヲ呈シ、通例腔内深紫色トナル、蓋シ此諸徴
 ハ只強壯ノ顯然タルヲ指斥スルノミ、
 見徴○第一、腹肚ノ長大、是レ懷孕見徴中ノ最モ表著
 ナルモノナリ、而シテ通例約スルニ第二月ノ頃
 ヨリ始メテ知覚スベクシテ平等ニ長大ニ漸々
 ニ増盛ス、然レモ動モスレバ其始メノ二三月間
 ハ子宮盂蓋ノ中ニ沈定スルニ因リ腹肚扁平ナ
 ル者モ亦之アルナリ、第四月ニ於テハ子宮底顯

然ト心窩ニ覺フベキ者往々之アリ、第五月ニ於
 テハ子宮底臍ト盂蓋トノ中間ニ覺知スルヲ
 得、第六月ニ於テハ其腫臍ニ達スルヲ以テ臍復
 タ陥没スルヲナク突出スルニ至リ、第七月及ヒ
 第八月ニハ其腫更ニ高ク劔状軟骨マデ昇リ第
 九月ニハ其高昇ノ極ニ至リテ再ヒ下降シ終ニ
 分娩前十四日マデ同等ノ處ニ位スルナリ、
 子宮増大スルニ因リ生スルノ腫ハ緊密ニシテ
 弾力アリ、其外圍好ク限定シテ葉ノ如キヲナサ
 ズ、蓋シ此腫ノ最モ突出スル部ヲ聞証法ヲ以テ聽

ケバ其音必不鈍濁ナルニ因リ實ニ之ヲ腹水腫
 アトスサヨリ區別スベシトス、又妊婦ヲ褥上ニ仰
 臥セシメテ聞証添ヲ行ヘバ腫ノ周圍及ヒ後部
 ニ於テ清澄ノ音ヲ聴クベシ、實ニ其處ニハ諸腸
 存在スルガ故ナリトス、
 腹肚ノ腫脹ハ懷孕ヲ鑒定スルニ最緊切ノ徴ナ
 リトス、凡レ腹水腫或ハ肝脾ノ变大或ハ卵巢水
 腫或ハ鼓脹或ハ結腸ニ蓄積スル燥屎モ亦之ヲ
 起スカ故ニ醫家其說ヲ發言スルノ前ニ方テハ
 宜ク其各症ヲ鑒別スルノ注意ヲ加フベシ、

第二「バルロットメント」○此徴ハ理学ニ基キテ之
 ヲ證スルカ故ニ甚ダ有利ナル一徴トナス、是レ子
 宮中ニ挂^カレル一物一流液中ニ浮遊スルヲ識得
 スル徴ナレバナリ、其法ハ患者ヲシテ直立若ク
 ハ半卧ノ位置ニ在ラシメ醫者左手ヲ腹面ノ子
 宮底ニ當テ右手ノ示指ヲ子宮頸ニ入レ以テ上
 ノ方ニ衝突スレバ胎兒之ニ答ヘテ下垂^{「ボツブド}
 スルト二三回ナルヲ覺フベシ、是レ此試法ハ約ス
 ルニ第五月及ビ第六月ニ於テ最緊要ナルベシ、
 第三子宮頸ノ光景○是腔中ヨリ検査シテ知ル

ベキ甚グ緊切ノ徴トナス、此處處女ニ於テハ硬クシテハ且ツ尖銳ナルヲ覺ヘ、懷孕ノ第一月ニ於テハ軟ニシテ大ニ横裂更ニ開クベシ、第二月ニ於テハ頸指頭ニ觸レ易ク其端脣狀ノ形ヲ失ヒテ子宮口ノ周圍ニ一環ヲ形テ造リ其部初姓^コパ^リミノ者ニ在テハ滑澤多産^コル^ル者ニ在テハ糙澁ヲナス、而シテ懷孕更ニ増進スル片ハ頸更ニ短ク更ニ高ク上リテ薦骨ノ上部ニ向キ、終ニハ只其中心ニ軟カキ環ヲ具シタル滑澤ノ小葉片ハミトナル、蓋シ子宮頸ノ此變更ト子宮

本質ノ増大トハ直腸ヨリノ検査ニテ微知スルヲ得レバ始メノ二三月間ニ於テ最モ直接ノ徴トシテ最モ確實ナリトス、
 第四胎児ノ心悸^ボル^ルセ^ルハ^ルト^ス○第五月ノ後腹脹ノ前面ト両側トヲ注意シテ検査スレハ胎児心臓ノ搏動ヲ誤認スルヲナカルベシ、生活シテ在ル者ハ通例一令時間百五十動搏チテ恰モ枕頭ニ時儀ノ響クカ如ク聞ユ、蓋シ此搏動ハ全ク母体ノ血運ニ關係スルヲナカルベシ、
 第五胎盤及ヒ子宮ノ血運ハ通例第四月ノ後聞

証筋ヲ以テ腹腹ノ下部ニ之ヲ發明スベシ、此音
ハ一種ノ風吹音^グノ如ク^ハシ^ド（胎盤呼吸^グラ^スセ^ン）
ト^レニシテ母体ノ脈搏ニ適應ス、

第六胎児ノ運動ハ通例第六月ノ後醫者患者ノ
腹部ニ冷手ヲ觸ルレハ之ヲ覺ッベシ、然レ此
動ハ時トシテハ風氣ノ運動或ハ腹筋ノ短縮ニ
因リテ錯雜スル^トアルベシ、

懷孕中ノ病候^グヲ^スレ^オグ^ルナル^シオ[○]早晨ニ發ス
ル嘔氣ハ太甚ナルニ非レバ他症コリモ有益ト
シテコレヲ見做スベシ、然レ此患者ノ体力ヲ虛

衰セシムル程ニ劇盛ナル^ルハ速ニコレヲ遏止
セザル^ト得ズ、硫酸密尼沙一錢ニ炭酸密尼沙
十^ハヲ和シテ四小時^{コト}ニ薄荷水ヲ以テ用井
通利ヲ催スニ至レバ鎮嘔スベキ^ト往々コレア
リ、然レ此大便好ク通利シテ後ニ尚嘔シテ止マ
ザルモノハ宜ク^昆私^多ニ密尼沙ヲ加フル劑
水素藏酸ノ少量若クハ枸酸^ハ得^サノ沸騰飲ヲ
用井ルヲ要スベシ、若シ夫レ一病癢ニ変性スル
ト見ユル者ニハ^礦酸類ニ^輕苦味藥及ヒ亞的兒
ヲ加フルモノヲ要須トシ^食料ニハ^唯其最^輕淡

ナルモノ、船用乾餅、麩、亀及ヒ小量ノ乳汁若クハ
 弱キ火酒ニ水ヲ加ヘタル者ヲ小量ニ且頻々ニ
 時期ヲ限定シテ用井ルヲ要ス、
 嘈囉ハルルト及ヒ胃酸症アインチモ亦早晨ノ嘔氣
 ト殆ド同治法ヲ要ス、然レモ嘔氣ノミニテ吐ヲ
 起スヲナキモノニハ温ナル加密列茶一鐘ニ食
 塩一撮ヲ加ヘテ輕吐ヲ起サシムレバ胆汁及ヒ
 酸液ノ停滯ヲ一掃シテ無究ノ功用ヲナスベシ、
 頑強ノ便秘ハ屢、嫌孕ニ併發スル所ナリ、而シテ
 コレヲ預防セントナラバ宜ク輕淡ノ食料ヲ用

井且日々最輕ノ下藥及ヒ灌腸法ヲ施スヲ要ス
 ベシ、
 下利ダリアハ太都胆汁ノ刺衝性ナルヨリ起ル
 所トス、而シテ先ツ托歇尔散ニ銀灰散ヲ加フルモ
 ノヲ用井尋ツイテ蓖麻油ニ阿芙蓉液ヲ加フルモノ
 ヲ用井終ニ芳香糖菓ニ他ノ收斂藥ヲ加フルモ
 ノヲ用フベシ、
 齒痛エツクスハ嫌孕中ニ發スル苦楚ノ總原ナリ、
 然レモ此症ハ大抵下劑及ヒ阿哈利ヲ用井テ後
 鎮痙劑及ヒ強壯劑ヲ用井レバ輕快ニ赴クベシ、

卷十七 尚古車胎科

若夫一齒ヲ抜去レバ太都他齒復ク疼痛ヲ發シ
 其震盪ヨリ墮胎「アボル」ヲ起スノ危険アリ、
 劇咳悸動「ハルオレ」テン「ト」シ「シ」及ヒ其他ノ懷孕中ニ
 起セル諸症モ亦宜ク合法ニ從テ之ヲ療スベシ、
 若夫實ニ歟衝ノ候アリト見ユルモノモ亦宜ク
 之ガ血ヲ奪フイナカルベシ、然レモ若シ分泌排
 泄ノ兩機ニ因テ輕快ニ赴クイナキハ、宜ク適
 量ノ瀉血ヲ行フヲ要シ、決シテ昏倒セシムルイ
 ナカルベシ、昏倒スル片ハ墮胎ヲ誘導スルイ
 レバナリ、

墮胎及ヒ半産「アボル」トシテハ、
 胎兒獨生ヲ保ツイヲ得ル已前ニ子宮コレヲ驅
 出スル者ヲ云、即チ第七月前ニ産出スル者ヲ云、蓋
 シ第七月已前ニ産出スル胎兒モ實ニ存活スル
 イヲ知レリト雖モ此ハ是例外ノ支ニ属ス、
 半産トハ、懷孕足月ニ至ラザル已前ニ驅出スト
 雖モ小兒生存スベクナリシ後ナルモノヲ云、
 原因ハ無數ニシテ一ナラス且、殆ト母体ノ健全
 ヲ損傷スルニ適スル諸機、胎兒ニ適及ブナリ、其
 尤ナル者ハ驚駭及ヒ劇怒ノ如キ感情劇痛昏倒

下利及ヒ裏急後重又自然ニ峻下劑ノ功力、裸麦ノ麦奴・逍遙ノ大疲労或ハ外部ヨリ子宮ニ應感スル壓搾・劇力・蒸液ノ漏洩・子宮内ノ腫瘍若クハ他ノ炊衝症或ハ栄養缺損等ナリ、此諸因ノ運為ヲナス式ハ或ハ小児ノ生活ヲ損壞スルニ因ル、茲ニハ昏倒・微毒及ヒ水銀服用ニ因ル吐涎運為ヲナスト見ユルナリ、或ハ子宮ニ收縮ヲ起スニ因リ、或ハ子宮ト胎盤ノ間ニ出血ヲ生スルニ因ル、是自然ニ胎盤ノ栄養ト血運トニ關係シテ遂ニ小児ヲ損壞シ、且子宮ノ収縮ヲ

起ササルヲ得ザルモノナリ、墮胎ノ症候ハ驅出ノ疼痛ト出血トニシテ此症夙ニ起ル氏ハ總テ危険及ヒ劇症少カルベシトナス、治法 二般アリ、第一ハ卵ノ驅出ヲ足月迄預防シテ孕婦ヲ固有ノ臨産時迄進行セシムルニ適當シ得ル節ニコレヲ行セ、第二ハ其莫失望ニシテ經過ヲ短縮セザルヲ得ズ、且出血ヲ更ニ防ガントスル節ニコレヲ施ス、其第一法ハ疼痛及ヒ出血僅少ニシテ其經過短

小ナル時ニ採用スルノ理アル法ナレバ、宜ク患
者ノ原因ト光景トニ準ジコレヲ定ムベシ、若シ夫
妊婦多血、嫩衝性ニシテ脈實ヲ兼子出血、僅少十
ル者ニハ淡薄ノ食餌ヲ与ヘ小量ノ硫酸密尼沙
ヲ複方玫瑰浸中ニ溶解シ用井、孟益ニ冷菴方ヲ
施シ、總テ衝動劇ノ行施ヲ禁シ、且、鎮痙阿芙蓉液
何^リセ^キダ^オナ^ルオ^ビヲ適量ニ用井レバ以テ其疼痛ヲ
輕快スルヲ得ベシトス、然レモ多血ヲ兼併ス
ルヲナキ者ニハ滋養スベキ輕淡ノ食餌ヲ与ヘ
テ熱茶ノ多飲ヲ禁シ、稀硫酸ニ阿芙蓉若クハ少

量ノ明答ヲ加ヘ用井ルヲ要スベシ、總テ硬キ冷
涼ナル箒状ニ灣屈シテ閉居セシムルハ何ノ症
ニモ鉄クベカラザル莫トナス、
其第二法ハ若シ出血久シクシテ身体ヲ損害セ
ントシ、且、卵ヲ排泄スルヲナキハ、宜ク醫者指
ヲ以テ之ヲ除去スルカ、或ハ裸麦ノ麦奴ヲ用井
テ之ヲ驅出センヲ要スベシ、
既ニ一回失敗セシ患者ハ第二回ノ懷孕中其已
前ノ惡癖ニ誘導サル、ヲ改変スルカタメ、宜ク
大ニ之ガ慎戒ヲ加フベシ、都城ニ住スル高貴ノ

人及び中等ノ人ニ通例之アルカ如ク、虚弱ト刺
衝トノ両性相混スル者ニハ、田野ノ清氣少量ノ
鐵製劑ヲ用井、又整然快利スルノ藥ヲ行ヒ且、微
温浴、冷水浴、或ハ滴水浴ヲ施シテ無究ノ効アル
ベシ、

懷孕ノ期「ケル」ケル。此期ハ生理学家ノ
議論紛々トシテ過ザル所ナリシガ方今殆ド四
十週即チ二百八十日ナルニ一定セリト見ユ、但
シ延ヒテ三百日ニ及ブトモ亦之アルナリ、若夫
醫者分婉ノ時限ヲ務メテ算定セシト要セバ、宜

ク最後ノ經血終ル日ヨリ二百八十日ト算計ス
ベシ、而シテ太約其時限ノ一週中ニ在ルベシト云
天然ノ出産ヲ「ケル」ケル。此ハ子宮ノ歛縮ニ兼テ
隔肉ト腹筋トノ機力ヲ加シ胎児ヲ体外ニ驅出
スルヲ云ナリ、

其機關ハ之ヲ二期ニ區別ス、即チ第一期ハ臨産ノ
初起ヨリ子宮ノ全開スル迄ヲ云ヒ、第二期ハ其
全開ノ時ヨリ分娩スル迄ヲ云、
其前徵ハ腹腫ノ下隆腔内ヨリ少量ノ粘液泄出
且、膀胱及ヒ直腸ノ刺衝増進ナリ、

尔後疼痛ヲ起ス、是、子宮ノ歛縮ナリ、而シテ其真
 微ハ子宮鈍痛シテ劇甚死ニ至ラントスルノ痛
 楚ナク特ニ背痛・腰痛ヲ覺ヘテ子宮投球ノ如ク
 緊密ニシテ堅硬ナルヲ覺ヘ、且、整然間歇シテ同
 齊ナル休歇ニ於テ起リ尋グニ全然タル安静ヲ
 以テス、

第一期中ノ検査ニ於テハ子宮口高ク薦骨ノ上
 部ニ對スルヲ覺ヘテ若シ其疼痛中指ヲ其中ニ
 入ルレハ緊密ナル膜囊ノ如キヲ覺ヘ、且、其疼痛
 過キ去ル迄待テハ其弛緩スルヲ覺ヘテ小兒ノ

現出部ヲ認得ベシ、
 疼痛留連スルキハ子宮口漸ク大トナリテ疼痛
 中膜囊其口ヨリ突出セントシ、且、血ヲ混シタル
 粘液ノ漏泄アリ、而シテ終ニハ子宮口全ク開張
 シテ児頭脱出スルヲ得ルニ至ル、蓋シ其全開ニ
 ハ劇ニキ戦慄或ハ嘔氣ヲ兼發スル一屢アリテ
 此時ヲ第二期ノ始トナスナリ、
 今疼痛ハ復タ子宮ニ限定スルト見ヘスシテ更
 ニ驅出ニ適スルノ徵ヲ得、且、腹部諸筋下送ノ強
 カヲ兼併ス、此時通例諸膜破裂シテ児頭腔ニ入

来ルナリ、此ニ於テ見頭其道路ヲ通過シテ漸々
 = 外口陰門ヲエキフナルヘハハニ輸出スレバ會陰
 恰モ破裂スルカ如クニシテ終ニ忽然脱出シ、速
 = 体及ヒ四肢コレニ嗣グナリ、
 此時太抵休歇時トナル時間五分時ヨリ十分時
 若クハ三十分時ノ差アリテ、此間ニ於テハ子宮
 胎盤ニ收縮ノ運為ヲナシテ或ハ全ク之ヲ驅出
 シ或ハ之ヲ下低ニ搬運シテ指以テ容易ニ之ヲ
 引出スヘキニ至ル、通例胎盤ハ一個ノ球ノ如ク
 卷轉シテ胎兒ニ向キタル面ヲ外方ニナシ驅出

スレバ嗣デ許多ノ血塊出ヅ、
 順産治法ト云フニ、胎兒ノオフロ○醫者ノ茲ニ先
 為スベキノ要務ハ腔中ヲ検査シテ其現出部ヲ
 預定シ、以テ盂蓋腔ノ大小ト其他ノ光景トヲ測
 知スル機會ヲ得ルニ在リ、是、其諸光景ハ出産ノ
 經過ニ大ニ關係スル所ナレバナリ、醫者若シ其
 時限ニ注意シテ其少シ已前ニ下劑ヲ用ユルモ
 大便ノ通利之ナキ者ニハ宜ク灌腸法ヲ施シテ
 其直腸ニ在ル所ノ糞便ヲ悉ク除去スルヲ要ス
 ベシ、又宜ク患者ノ精神ヲ失ハズシテ少シ宛行

三三

歩スル一ヲ勸誘シ、且適時ニ尿ヲ利スルノ機會ヲ得セシムベシ、而シテ又養料缺乏ノ為ニ脈ヲ虚憊セシムル一ナク、且要需ナクシテ衝動劑ヲ許シ與フル一ナカルベシ、若シ第一期ノ末ニ方テ子宮口ノ前唇見頭ト陰處^ビトノ間ニ下墜スル片ハ醫者宜ク二指ヲ以テ輕々ニ之ヲ後部ニ壓推スベシ、此法良効ヲ奏スル片ハ速ニ第二期ノ更ニ劇甚ナル驅出痛之ニ繼發スベシトス、若シ見頭會陰ヲ張擴スル片ハ、宜ク其部ニ一手ヲ當ツル一恰モ見頭ノ進出ヲ少シク遲延シ、且

コレヲ陰處ノ方ニ輪スガ如ク注意シテコレヲ支柱スルヲ要スベシ、若シ胎兒全ク産出スル片ハ強鞞ノ絲ニテ絢成セル帶ヲ以テ臍ヨリ三寸ノ距離ニ於テ臍帶ヲ周匝シテ密ニ結紮シ又其前一寸ノ處ニモ尚^ホ一帯ヲ施シテ兩帶ノ中間ニ於テ臍帶ヲ切斷スベシ、但シ產科醫^ニ一宜ク其切斷スル所ノ物ヲ注視スルヲ要スベシ、此時胎兒ハ看護ニ任ジタル婦人ニコレヲ分付シ産母ハ少量ノ温茶若クハ酒水^トヲ以テ其勞ヲ慰スベシ、而シテ後醫者ハ其左手ヲ産婦

ノ腹上ニ當テ、子宮ヲ捉テ、且、杖柱シテ以テ
 胎盤ノ安全ニ驅出スルヲ催進シ、其胎盤ヲ右手
 ノ示指ニテ臍帶接着ノ處ヲ覺フル許ニ低ク下
 墜スルキハ、速ニ腔軸ノ形ニ於テ徐々ニコレヲ
 牽引シ以テコレヲ腔外ニ引出スベシ、此ニ於テ
 陰處^ポハ輕々^ツ之ヲ乾ハカシ、且、温布ヲ産婦ト
 其溼^シリテ血ニ汚レタル衣服トノ間ニ挿入シテ
 以テコレヲ掩ヒ、且、幅濶キ綿帶ヲ全ク胃部ノ周
 圍ニ施スベシ、又産婦ハ寒冷ヲ覺ヘザルガ為ニ
 其休ヲ温保シテ半小時間安息セシメ、且、其寢衣

ヲ変更スル前ニ乘ニテ穩婆ハ其見ヲ洗ヒ、産婦
 ヲシテ快ク其褥上ニアラシムベシ、
 假痛^スハバ^バイ^イオ^ウ〇^〇出產ノ初期ニ於テハ困難ニ
 シテ遅延スベキ一原因アリ此原因ヤ常ニ多ク
 見ル所ナレバ即ラ茲ニ詳記スベキ者ニシテ乃
 チ疼痛即チ子宮ノ歛縮ヲ子宮ヨリ其近部ニ感傳
 セシムルト見ユルモノナリ、而シテ産科者流容
 易ニ之ヲ体察シテ上文ニ記載セルガ如キ真ノ
 子宮歛縮ノ諸徴ニアラザルヲ知ルベシ、其故如
 何トナレバ此症ハ鈍痛ナルヲナクシテ其苦惱

最甚シク背痛ヲ起サズシテ膀胱直腸或ハ膈部
 一疼痛ヲ起シ、間歇ナク留連シテ子宮ハ僅ニ硬
 ク或ハ毫モ硬キ一之ナキヲ以テナリ、之ヲ治ス
 ルノ法、甚簡單ナリ、即、膀胱ハ之ヲ空虚ニナシテ
 直腸ハ灌腸法ニテ清滌シ、又疼痛ノ部ヲ絶ヘズ
 摩擦シ、且、緊急ナルニ臨、テハ宜ク小量ノ阿芙蓉
 ニ裸麦ノ麦奴ヲ加ヘ用フベシ、
 各部現出^{オカ}ハ^{プレ}レ^トカ^{テイ}ン^シト^ス。○子宮口ニ最
 近ク且、始、テ醫者ノ指ニ觸覺スル胎児ノ部分ヲ
 名^ケテ現出部^アグレ^バレン^トト^テ称スルナリ、

其現出部ハ之ヲ分テ二種トナス、曰ク順産^好
 ル^ラ曰ク逆産^好ト^シナリ、是ナリ、順産ハ胎児ノ縦^縦徑^徑
 シ^アキ^子宮^ノ縦^縦徑^ニ適^適應^シ、逆産ハ胎児ノ子宮ニ
 交叉ス、其順産ニ於テハ胎児或ハ頭或ハ尻或ハ
 足ヲ現出シ、逆産ニ於テハ肩ヲ現出ス、
 頭顱現出^アレ^セン^トシ^テ○我輩此旨趣ヲ講明
 スルニハ先、孟益ノ大小ト見頭ノ之ニ適應スル
 部ノ大小トニ關係シテ之ヲ論スベシ、
 前後^{前後}經^徑 横^横徑^徑 斜^斜徑^徑
 孟益^{孟益}縁^縁 四^四寸^寸 五^五寸^寸 五^五寸^寸又^又四^四

孟盞腔

五寸

四寸半

出口

四寸

四寸

孟盞出口ノ前後徑ハ尾骶骨ノ反轉ニ因リテ一寸ノ増加ヲナスベシ、四半寸若クハ半寸ノ減縮ハ孟盞ノ内面ニ在ル軟部ノ展縮ヲ許容スルカ故ニ概シテ右ノ大トナスト要ス、前後ノ徑三寸ヨリ小ナル氏ハ全ク化育セザル胎兒ニテモ復々生活シテ産出スルナシ、又此大ヨリ小ナル孟盞ニ於テハ鉗子ヲ用井ル能ハズ、又前後徑二寸ヨリ小ナレバ穿透鑽ヲ用井

ル能ハサルノ説ハ太都一定スル所ナリ、是故ニ醫官「チルチ」ルハ兒頭ノ大小ヲ記載シタリ、蓋シ其書ハ接生法ノ論説ト實驗トヲ記スルノ頗ル拔群ナレバ學者尚詳説ヲ知ラント要セバ宜ク就テコレヲ看ルベシ、

縱徑(後頭前頭徑) 「オ」シピル (フ) 四寸乃至四寸半

橫徑(兩巔頂骨徑) 「ヒ」カ (四) 三寸半乃至四寸

斜徑(後頭顛徑) 「オ」シピル (ハ) 五寸

直下徑(前頭顛徑) 「フ」コタル (ハ) 五寸半

肩ノ橫徑 四寸 又三四乃至五寸

膝ノ横徑

四寸乃至五寸

醫官リグバイ曰ク順産ニ二種アリ、曰ク見頭ヲ現出スル者、曰ク孟盍ヲ現出スル者是ナリ、其第一症ニ於テハ頭顱或ハ顔面ヲ現出シ第二症ニ於テハ尻殿・膝或ハ足ヲ現出スト、

頭顱ハ諸般ノ位置ニ於テ孟盍ノ縁ニ現出スベシ、故ニ其著者ハ之ヲ八種ニ區別スト雖モ今實際ノ目的ニ之ヲ適應セシメテハ四種ニ區別シテ足レリトナスベシ、
第一ノ位置即位置ノ最衆多ナル者ニ於テハ見

頭斜ニ孟盍ノ縁ニ在リテ前頭ハ右部ノ薦骨ト腸骨トノ軟骨接合ノ方ニ在リ、而シテ後頭ハ左部辭曰醋^{四名}ノ方ニ在リ、若シ指ヲ之ニ入レテ檢点スルニ子宮口全ク開ケルハ、孟盍ニ交叉シテ斜行スル矢縫線ヲ發明スルヲ得ベシ、此時左方ニ向テ之ヲ檢点スレバ二個ノ他ノ縫合ヲ分別スベシ、即人字縫ノ二別ヲ云ナリ、又後部及ヒ右方ニ向テ檢点スルハ、四個ノ縫合終ル所ナル前顱門ニ至ルベシ、而シテ其指ニ最近ク先觸覚スルノ部ハ右方ノ巔頂突起^{タル・外・パ・列}ヘ

スラ^ンナリ、今児頭・子宮ノ驅出力ニ因テ尚^ホ下低ニ
 至ルキハ殆^ト全^シ斜形ヲ保チテ右方巔頂骨ノ
 上部及ヒ後部先^ツ驅出シ、且^ツ頭顱産出スルハ其
 顔面母體ノ右股ノ方ニ向ケリ、
 第二ノ位置ニ於テハ後頭右部髀臼ノ方ニ向キ
 第三ノ位置ニ於テハ後頭右部薦骨ト腸骨トノ
 軟骨接合ノ方ニ向キ、第四ノ位置ニ於テハ左部
 ノ方ニ向ク、而シテ其第二ノ位置ニ於テハ第一
 ノ位置ノ如ク児頭盃蓋ヲ通過シテ所要ノ變更
 ヲナシ、モ^ツチ^スモ^ス又第三及ヒ第四ノ位置ニ於

テハ出産ノ機・催進スレバ胎児ノ後頭漸々ニ運
 轉シテ第一及ヒ第二ノ位置ニ適應スル位置ト
 ナルニ至ル、
 各種ノ現出鑒別^トナイ^トア^ラブレ^セン^ス。オ^フテ^ハ。頭
 顱ノ現出ハ其堅硬ナルト圓形ナルト之ヲ透截
 スル縫合トニ因リテコレヲ鑒別シ、○顔面ノ現
 出ハ軟柔ニシテ形不整ヲナシ、且^ツ鼻アルヲ以テ
 コレヲ知ル、蓋シ鼻ハ頭顱ノ現出ニ於テ矢縫ノ
 子宮口ニ交^カスルガ如ク一般ナリ、○尻殿ノ現
 出ハ尾骶骨ニ因テ之ヲ知ル、而シテ其後ニハ薦

骨ヲ驗シ前ニハ肛門ヲ驗スルヲ以テ之ヲ鑒別
 スベシ、○下肢ノ現出ハ足或ハ膝ノ固有形ヲ以
 テ之ヲ鑒別ス○上肢ノ現出ハ肩胛腋或ハ肘
 ノ固有形ヲ以テ之ヲ鑒識ス、而シテ拇指ハ只ニ
 手ヲ足ヨリ區別スルニ適スルノミナラズ、尚且
 右手ヲ左手ヨリ區別スルニ適スベシ、若シ夫レ
 現出ノ部甚ダ高キニアリテ觸覺スルヲ得ズ、
 胞膜圓錐ヲナシテ子宮口ニ突出シ、且其破裂ニ
 因リ多量ノ水液漏泄スルモノハコレヲ肩胛現
 出ト察知スベキナリ、

難産「オ・ガン・ラ・ボン・ウ・ゲ」○出産ノ機運尋常ノ時限中
 ニ完了セザルハ、諸般ノ原因アルガ故ニシテ或
 ハ母体ニ關係シ、或ハ胎兒ニ關係ス、而シテ今余
 ガコ、ニ記載セントスル原因ノ第一ハ
 子宮ノ虚衰及ゼ不整ノ機轉「レ・イ・ギ・バ・ル・エ・ン・ク・シ」
 「ン・オ・ゴ・フ・ゼ」○此症アレバ陣痛間ノ休歇大ニシテ
 其痛ノ起ルハ短ク且胎兒ニ機運ヲナスコト少ナ
 ク或ハ甚モ機運ヲナサズ、此症ハ體質微弱弛緩
 性ノ婦人ニ於テ少シトセズ、而シテ其境界中ニ
 在テハ産婦ト醫者ト相共ニ盡シク耐忍ヲ負フ

ヨリ外ニ過慮スベキモノアルナシ然レモ若
シ留連シテ患婦ノ身心虚衰ニ至ラントスルモ
ハ有カナル調攝法ヲ行フヲ要須トナス、而シテ
症状ニ因リテハ睡眠ニ因リテ体カヲ回復セシ
メンガタメ阿芙蓉劑ヲ用フベキアリ、然レモ
此症ニハ概シテ衝動性ノ灌腸法ヲ大ニ利アリ
トス、但シ茲ニ用フベキ藥ハ裸表ノ表奴ナリ、此
藥ハ殆ド間断ナク子宮ニ收縮力ヲ起サシムル
ニ因リ子宮ニナス所ノ功確切直達ニシテ迅疾
ノ機轉ヲ發セシメテ其内在ル所ノ物ヲ驅出ス

ルニ至ルト見ユ、而シテ或ハ散劑ノ形トナシ、或
ハ直ニ泡劑トナシ、或ハ丁樂劑トシ用フレモ裏
ニ就テ丁樂劑最モ効アリテ最モ便利ナリ、服量八十
五匁ヨリ半錢ナリトスレモ少量ニ數回与フル
ヲ最良法トナス、譬へバ散劑ナレバ五匁宛ヲ五
分時若クハ十分時毎ニ与ヘテ其効ヲ見ルニ至
ルガ如シ、此藥ハ嘔氣ヲ起シ易シト雖モ、又茶若
クハ加非ニ賽セ易シ、○醫官キヤルチルノ説ニ
從へバ其主治左ノ如シ、即第一ニハ顯著ノ原因
ナク隱微ナル疼痛アル症、第二ニハ子宮口軟柔

世一
刀

ニシテ開張シ易キ症、第三ニハ天然ノ分娩ニ毫
 モ障碍ナキ症、第四ニハ頭顱若クハ尻殿現出シ
 テ分娩全ク催進スル症、第五ニハ頭顱ノ病候モ
 亦渾身ノ刺衝モ甚シク之アラザル症是ナリ、又
 其禁忌ハ即第一ニハ子宮口硬固ニシテ強直ナ
 ル症、第二ニハ現出部分明ナラザル症、第三ニハ
 現出良ナラザル症、第四ニハ孟盆畸形ナル症、第
 五ニハ軟部ニ分娩ヲ妨クル劇症アル者、第六ニ
 ハ頭顱ノ病候或ハ渾身ニ甚シキ刺衝アル症是
 ナリ、



羔膜液ノ量甚ダ多キ症「トキベツリキオフルアムテ」
 イレ○此症モ亦時トシテハ怠慢ナル出産ノ原因
 中ニ纂入ス、而シテ此症ハ産婦虚弱ニシテ胎児
 微小且、栄養足ラザルノ徴ナリト云テ虚説ニア
 ラズ、之ヲ救援スルノ良法ハ他ナシ其膜ヲ破ル
 ニアリ、然レモ適當ノ注意ナク謾ニ之ヲ行フ
 勿ルベシ、是ニ由テ却テ怠慢ナル出産ヲ誘導
 スルテ少カラザレバナリ、
 胞膜ノ破裂早キニ過グル症「ブルマオフルメナム」
 ブラ○此症ハ其膜ノ素質薄弱ナルニ因リ、或ハ

ハ子宮口・腔若クハ外口ノ強剛ニ因リ、或ハ其開張セザルニ因リテ進出遲延ヲナス、此景况アルハ必ズ燉衝ノ諸症・緊迫ノ劇痛大虚衰及ビ腔内ヨリ稀薄酷厲ノ液ヲ流出スル症ヲ繼發スルヲ免カレズ而シテ其諸症寛解セザルハ舌乾燥シテ棕色トナリ、脈急疾ニシテ淤滯シ、且、其他衰憊ノ諸徴ヲ見ハスベシ、

治法 時日ヲ費スト燉衝ヲ預防スルトノ二法ニ歸ス其法第一患者ノ体質之ヲ施ストテ得ハ宜ノ適宜ノ泻血ヲ行フベシ、第二子宮ノ機關ヲ

鎮靖スルガ為ニ適量ノ阿芙蓉ヲ用フベシ、第三患者泻血スルトテ得ザル者ハ泻血ノ代用トシテ少量ノ吐酒石ヲ與フベシ、而シテ産道ヲ清涼ニシ且、滑利ナラシムルカタメ腔中ニ多量ノ家猪脂ヲ塗抹スベシ、此ノ如クスルハ諸症太抵幸福ニ經過シテ數時間ノ安息及ビ睡眠ノ後陣痛再々起リテ強硬ヲ除却シ且、安産スルニ至ルベシ、

垂腹ベシスベシルベシ口ハ仰ル○許多ノ小児ヲ産ミタル婦人ノ出産第一期ニハ腹被縦緩スルガ故ニ子宮ノ

二

世

三

位置甚ク斜形ヲナスニ因リ分娩遅延スル一往々之アリ是腹被縦緩スル片ハ子宮前部ニ傾クガ故ニ児頭孟蓋縁ニ驅出サル、一ヲ得ズ、只後方薦骨ノ上部ニ向テ送ラル、ノミナレハナリ、此症ニ行フベキノ良法ハ産婦ヲシテ仰臥セシメテ一條ノ繃帶ヲ垂腹ノ下部ニ施シ、之ヲ以テ子宮底ヲ支柱シ且、牽上ゲテ後部背ニテ之ヲ結駐スベシ、

臍帶過短^{「シヨ」}ムビリトカ^{「ツ」}ス、オ^{「フ」}ルゼ^{「ド」}オ^{「ル」}○此症ハ通例諸書ニ分晚延滞ノ一因トシ列載スレトモ甚ク稀有

ナル一症ニ属ス、而シテ臍帶胎児ノ頸項或ハ軀幹ヲ数回纏繞スル一モ亦同ク虚假ノ一因トナス、若シ夫レ児頭既ニ産出セシトシテ不當ニ遅延スル時空隙多クシテ臍帶頸圍ヲ纏繞スルヲ覺フル者ハ宜ク務メテ之ヲ放鬆シ、且、其帶ヲ肩上ニ滑脱セシムベシ、若シ夫レ之ヲナス一ヲ得ズ分娩遅延シ、且、小児縊死セントスルノ危険アル者ハ示指ノ爪ヲ以テ一截^{「キレ」}刺ヲ造リ、且、其截^{「キレ」}刺ヨリ之ヲ透截スルヲ良法トナスベシ、

子宮ノ焮衝或ハ傷冷毒^{「イ」}ル^{「レ」}ウ^{「マ」}チ^{「ム」}ク^{「マ」}スト^{「リ」}イ^{「ト」}オ^{「ト」}

世五
刀

ウオテリセユ。○此症時トシテハ子宮ノ斂縮力ヲ甚
 シク艱難無効トナラシムルヲ以テ分娩遅延ノ
 原因トナルニアリ、通例患者自ラ云、身体熱アリ
 テ安靖ナラス腹部虚衰シテ腸中ニ積滯アルニ
 苦シ、且分娩前暫時間、色濃厚ナル尿、微量ヲ漏
 泄セリト、此症ニ用フベキノ藥劑ハ、泻血、冷菴方
 硫酸密尼沙及ヒ炭酸曹達ノ下劑及ヒ阿蛤利飲
 ナリ、
 子宮口、腔或ハ會陰ノ癥痕シカトカトリセリス、オ
 リキナ、ウオムル。○此症ハ已前ノ出産遅延セシキ
 器

械ノ用法宜カラザルヨリ破裂ヲ生シ、其愈着ス
 ルニ當テ癥痕ヲナス者ナリ、此症時トシテハ児
 頭ノ現出ニ妨碍ヲナスアリ、此症ヲ治スルノ
 良法ハ太率オホ自然ノ良能ニ任ジ、炊衝ヲ防ギ、泻血
 若クハ吐酒石ヲ用テ舒暢ヲ催進シ、阿芙蓉劑
 ヲ用テ時節ヲ待テ家猪脂若クハ冷酥コウヲ用
 ヲ以テ諸部ヲ軟柔滑利ニナス等ナリト見ユ
 レ、氏、若シ右ノ諸法一モ功驗ナク、子宮ノ斂縮力
 全ク艱難ヲ凌グニ適セザルハ、宜ク見頭ノ前
 ヲ一直線ニ伸引シ注意シテ其妨碍アル部ヲ藏

頭刀ノ双ヲ以テ摩スルヲ要スベシ、又處女膜・全
 ク破裂セズ「イトン・ヒメル」レ艱難ヲ起スニ足ル程
 ナル氏ハ方式ナクコレヲ截開シテ可ナリ、
 子宮口ノ瘰腫「カホル」セカホル「エノ」マ・オ「リ」○子宮口ニ瘰腫
 アリテ且、潰ロスル「アル」者モ受孕シ、且、懷孕ス
 ル「一」之アリ、此症、刀ヲ以テ之ヲ截断シ或ハ兎頭
 ヲ减小スルニ非レバ病毒ニ因リテ硬キ「一」軟骨
 ノ如ク開張自由ナルヲ得ザル症ナレバ之ヲ除
 治スル「一」能ハズ、
 陰脣ニ血液滲漏シ或ハ静脈腫ヲ生ジ及ゼ水腫

ヲ發スル症「エ」トタラハセ「ア」エ・ワ・リ・オ・コ・フ・ス・シ
 ヲテ・デ・ト・オ・ウ・ス・セ・エ・ル・ス・オ・グ・ス・オ・フ・パ・ル・ト・ビ・ア・オ・ド
 ヲル「一」ム ○此症ハ体質弛緩スル婦人ニ少シトセ
 ズ、又分娩ノ妨碍ヨリモ困難ナル兼發症トナス
 ナリ、若シ静脈腫アリテ破裂スル者ハ危険ナル
 出血ヲ起スベシ、而シテ其出血・疼痛毎ニ再發ス
 ル氏ハ、鉗子或ハ其他分娩ヲ催進セシムル簡便
 方ヲ施スヲ緊要トナス、又陰脣ニ血液滲漏スル
 者ハ冷菴方ヲ行ヒテ其血ノ吸收スルト見ユル
 ニ至ルヲ最良法トナス、然レ「氏」其腫・焮・衝・アリテ

産科寶函
 世七
 尚古車痛本

釀膿セントスル恐アル者ハ宜ク乱刺シ及ビ糊
 劑ヲ帖スルヲ良トナスベシ、又水腫ハ強烈精ノ
 温菴方ヲ行セテ之ヲ療ズルヲ宜トス、
 膀胱ノ膨脹^{「」}プシステ^{「」}オン^{「」}フ^{「」}ゼ^{「」}ブル^{「」}ラ^{「」}○難産ニ
 於テ膀胱常態ヲ失ヘルハ是、一個ノ障害ナリ、然
 レ氏此症ハ引^{カテ}溺^{トル}管ヲ以テ容易ニ之ヲ治スル
 ヲ得ベシトス、而シテ茲ニ最好ク適用スベキハ
 新州膠ヲ以テ製セル男子用ノ小引溺管ナリ、
 膀胱ノ結石^{「」}ゼ^{「」}ブ^{「」}ラ^{「」}ン^{「」}ル^{「」}○分娩催進スルノ時
 期ニ於テ見頭現出セントスル通路ニ結石アル

片ハ分娩ヲ遅延スベキ劇因ノ一個ナルベシ、然
 レ氏此症幸ニシテ稀ナリ、若シ自然ニ此症アリ
 テ分娩スルハ能ハザル片ハ宜ク外科手術ニ因
 リ之ヲ抜キ去ルベシ、
 燥尿ニ因リテ直腸膨脹スル者^{「」}フ^{「」}ダ^{「」}ス^{「」}レ^{「」}ク^{「」}ン^{「」}去^{「」}ム^{「」}ハ^{「」}バ^{「」}オ
 へ^{「」}ハ^{「」}セ^{「」}ル^{「」}ス^{「」}ハ^{「」}通^{「」}例^{「」}諸^{「」}書^{「」}ニ^{「」}分^{「」}娩^{「」}障^{「」}碍^{「」}ノ^{「」}一^{「」}因^{「」}ト^{「」}シ^{「」}記
 載スト雖モ、此症ハ畧様因トスルヨリモ全身ノ
 運化強健ナラザルニ關係シテ或ハ分娩艱難ノ
 原因トナリ、或ハ其繼發症トナルナリ、茲ニ要需
 トスル良藥ハ衝動性ノ灌腸藥及ビ匙柄ヲ以テ

五

世

五

燥屎^バヲ除去スル法是ナリ、
 腫瘍ハ分娩ヲ障碍スル最^モ劇因ニシテ且^ツ諸種^ノ
 リ、而シテ其腫硬骨様^トエキ^スス若クハ軟骨様ナ
 ル^ハ、宜ク猶孟蓋ノ畸形症ニ於ケルガ如ク或
 ハ機會ヲ待チテ自然ノ良能ニ任シ、或ハ鉗子ヲ
 用キ、或ハ見頭ノ减小法ヲ行ヒ、或ハゲ^リアリ
 ン^ニ截法ヲ施シ、或ハ懷孕ノ全期完了セザル時限
 ニ於テ分娩ヲ催進スルヲ要スベシ、
 若シ其腫子宮ノ肉腫^トス^ライ^リシテ腔内ニ充
 満スル者ハ、宜ク其腫頭ニ絲ヲ緊密ニ廻ラシ以

テ之ヲ紮切スルヲ最良法トナスベシ、
 若シ夫レ^レ出産ノ初起ニ於テ孟蓋ニ運轉スベキ
 一腫瘍^{アル}ト^キ發明セバ^ハ醫者宜ク已^レガ力ニテ
 之ヲ上^ニ壓シテ見頭ノ路上ヨリ避退セシメ以テ
 見頭其腫ノ前部下方ニ墜下スルニ至ルベシ、
 若シ其腫卵巢ノ長大ナル者ナルカ、或ハ包腫ニ
 シテ産出ノ路上ヨリ上^ニ壓スルヲ得ザル者ハ
 宜ク套管鍼^カヲ以テ之ヲ刺破スベシトス、
 然レ^モ其腫硬固ニシテ壓搾スルヲ得ザル者
 ハ宜ク猶孟蓋ノ畸形症ニ於ケルガ如ク之ヲ療

胎形孟蓋^{「テ」}ハ^{「ル」}ホ^{「ル」}ズムド。○孟蓋ノ平等ニ小形ヲナ
 シ或ハ其縁或ハ其腔某部或ハ其出口ノ狭窄ヲ
 ナス者ハ自然ニ分娩障碍ノ最劇因ナルベシ故
 ニ之ニ救助ヲ加ヘザレバ唯ニ胎児ヲ損壊スベ
 キノミナラズ尚且^{「ホ」}母体ノ生カモ全ク無益ノ努
 カニ於テ虚衰スベキナリ又胎児孟蓋中ニ壓縮
 サレテ留止スルヲ得ルキハ軟部ノ破裂腔ヨ
 リ膀胱及ビ直腸ニ至ルノ裂孔又存活スルモ患
 者ノ畢生ヲ不幸ニナス他ノ繼發ヲ起スベシ、

治法 孟蓋狹隘ナルガ為ニ見頭ノ通過遲延ス
 ル者ハ宜ク楔^{「ハ」}ク若クハ鉗子ヲ以テ分娩ヲ促
 ガスベシ然レ^{「レ」}其器械ヲ用ヤルヲ能ハザル者
 ハ宜クゲ^{「ー」}ザリアン截法ヲ施スベシ戰慄吐逆
 シテ舌乾燥棕色ヲナシ且^{「ッ」}脈度百動ノ上ニ出ル
 者ハ宜ク有力ノ藥劑ヲ用ヤルヲ要スベシ、
 胎児ノ現出不佳^{「マ」}スル^{「オ」}フレ^{「セ」}ン^{「テ」}ル^{「ド」}シ○此症ノ
 原因ハ多ク難産ニ在リ然レ^{「レ」}之ヲ詳記スル
 ハ此小冊子ノ能クスル所ニアラズ、
 胎児ノ畸形^{「テ」}ホ^{「ル」}ズ^{「ミ」}チ^{「ル」}ドス○頭水^{「中」}ニ^{「水」}液

胎児ノ畸形ヲホズミチルドス○頭水^{「中」}ニ^{「水」}液
 尚古軒清本

漢醫願所 胸腹ノ腫瘍見頭過大及也暹羅ノ孖子
 ツヤメニスノ如ク臍帶ニテ二兒連着スル者「ツヤメニス」
 口シタ等ハ皆分娩ノ障碍トナルモノナリ然レ
 凡我輩之ヲ比喻トシテ記載スルノ外別ニナス
 ベキモノアルナシ、

尻殿現出「グオリル・バチ・イ・ゼ・セ・ン・ト・ス」
 スルニ六十人中ニ一アリテ太率女体ニハ害ナ
 シト雖モ小兒ハ分娩中臍帶ノ壓縮ニテ三人半
 中ニ一人害ヲ被ルナリ然レ凡分娩ノ末期ニ
 方テ孟孟中ニ於テ小兒彼是ノ部壓縮ヲ受クル

時ノ醫者コレニ救援ヲ加フルルハ自然ノ良
 能分娩ヲ完了スベキヲ以テ茲ニハ些少ノ手法
 ヲ緊要トナス、又時トシテハ見頭ヲ捉定スルニ
 因リ体ヲ驅出セシ後遲延ヲ起スニアリ、此症ニ
 ハ通例些少ノ扶佐ヲ以テ之ヲ寛解シ、且分娩ヲ
 完了スベシ、
 下技現出「ブルセル・エテ・キ・スト・レ・オ・フ・チ・ン」
 膝或ハ足ノ現出ニ因テ之ヲ知ル、但シ分娩催進
 スルルハ足部突出ス、而シテ百五人中ニ一人ア
 リトスルガ故ニ其多前症ニ次グ、又死ハ二人半

産科寶函

四二

出血^{ルヘ}モ^{ルル}レ^ヂグ^オ○出血失禁^エン^ブル^ホハイ^モド
 エル^ヂレ○此兩症共ニ胎盤ノ子宮口ニ附着スルヨ
 リ起ルガ故ニ若シ懷孕ノ末期ニ於テ子宮口將
 ニ開カントスル片ハ其胎盤ト附着スル處相破
 裂シ以テ出血ヲ生ズルナリ、而シテ其胎盤ノ所
 在失常ノ症ハ之ヲ胎盤先出^ラビ^セン^ダ胎盤現
 出^ラセ^ラセ^テレ^タル^ニ等^ト稱ス、其附着或ハ全ク子
 宮口ノ中心ニ於テシ、或ハ局部ニ於テス、
 此種ノ出血ヲ區別スルハ微ハ出血常ニ顯著ノ

原因ナク、懷孕自然ノ界限ヲ終ル前、約スルニ二
 三週ニアリテ血ノ流出、子宮ノ斂縮ニ兼發スル
 ナリ、而シテ其始メハ適量或ハ少量ナリト雖モ
 數回再發スル者ハ手術ヲ以テ之ヲ寛解スルカ、
 又ハ時ニ生ズルガ如ク胎盤全ク分離シテ見頭
 ノ前ニ腫ヨリ驅出サル、ニ非レバ危險ノ出血
 ヲ發シテ遂ニ患者ヲ死ニ至ラシム、
 検査ヲ行ヒテ子宮口マデ搜索スルニ一個厚重
 柔軟ナル海綿質ノ物、血塊ヨリモ緊密ニシテ指
 ニテ之ヲ破碎スベカラザルヲ覺フ、若シ其物只

胎前

胎前

子宮口ノ局部ノミヲ掩ヘハ其縁胎膜ト連ルヲ
覺ヘ且恐クハ其胎膜ヨリ現出部ヲ覺ユルヲ
得ベシトス
治法 出血大甚ナラズ胎盤只子宮口ノ縁ニ附
着スルノミニテ其空窵ヲ蔽フナク且疼痛ヲ
起ス者ハ宜ク其胎膜ヲ破裂スベシ是如何トナ
レバ子宮口ヲ開張スル見頭ノ壓迫能ク尿管ヲ
閉止シテ其餘ノ出血ヲ預防スルヲ以テナリ
若シ夫レ胎盤只少ク子宮口ニ附着スルノミ
ニシテ足ヲ現出レトスル者ハ宜ク膜ヲ破

リテ兩足ヲ捉ヘ且一舉ニ胎兒ヲ引出スベシ
若シ出血劇甚ニシテ子宮口未ダ開張スルヲ能
ハザル氏ハ之ヲ治スルノ通法トシテ宜ク奮キ
綿布片ヲ腔中ニ密塞シテ患者ヲ全ク安静ニシ
且耻骨ニ冷水巻方ヲ施スベシ而シテ後若シ子
宮口開キテ子宮口ト胎盤ノ間ニ手ヲ入ルベキ
ニ至ラバ宜ク其膜ヲ破リテ兩足ヲ捉ヘ廻轉術
ヲタペルニシテオノ通法ヲ以テ分娩ノ効ヲ收ム
ベシ
其記者ノ説ニ從ヘバ手ハ宜ク胎盤中ニ在リテ

産科寶鑑 四四 治古車清林

胎盤ト子宮トノ間ニアラザルベシト、是之ヲナ
 ス一甚ダ困難ナルノ一事ナリ、
 此ノ如キ諸症ニ於テハ胎盤分裂スルヲ以テ小
 児大抵死スルヲ常トシ、且廻轉術材フタルニシ
 ゴ及ビ出血ニ因リ母体大ニ危険ニ属スルガ故
 ニ醫官「ラトホルド」及「シムプソン」ノ両君ハ胎
 盤ノ全分裂及ビ拔出ヲ行ハント謀リタリ、即チ出
 血失禁ノ子宮口強硬ニシテ開クベカラザルヲ
 兼ヌルノ劇症ハ廻轉術ヲ施ス一能ハズ、且危険
 ナルベキガ故ナリ、特ニ出血失禁ノ令婉過急ニ

シテ子宮口及ビ其頸ノ未ダ化育全カラザルヲ
 兼ヌル症又彎曲セル蓋蓋ニ於テ胎盤現出スル
 症ハ患者甚シキ虚衰ニ至ルヲ以テ廻轉術ヲ行
 フヲ禁ジ、又胎児必ズ死ニ至ルベク、且夫レ莫不
 時ニ起ルガ故ニ其生命ヲ保續スベカラズ、然レ
 凡他ノ卓絶ナル産科者流ハ此論ヲ甚シク説キ
 破リタリ、
 分娩前及ビ分娩中ノ出血「ヘルモ
 ンレ」^ル「エモ
 ンレ」^ル「ヂ
 ン」^ル「ホ
 グ」^ル
 〇其傍發ノ出血ト名ク「ル
 症」ハ大都胎盤某
 部ノ分裂ニ關係シテ外来ノ劇力筋動ノ失宜及

スベシ、即、患者ヲシテ一個ノ硬固ニシテ清涼ナ
 ル褥上ニ平卧セシメ、陰露ニ氷冷水ヲ菴方トシ
 施シ、冷水ノ灌注法ヲ行ヒ、且、硫酸或ハ醋酸鉛ニ
 阿芙蓉ヲ加ヘ用ル等是ナリ、
 右ノ諸法ヲ行フト雖モ速ニ効ヲ奏スルナキ
 片ハ、宜ク腔中ニ栓塞ボタムヲ填實スベシ、而シテ
 之ヲ行フニハ海棉ハ小片數個ヲ腔中ニ充テ、
 毫モ出血スベキ空隙ナキニ至ルベシ、然レモ若
 シ出産後ノ如ク子宮空虚トナル片ハ此法決シ
 テ用ルル勿ルベキノ注意アラシトテ要ス、如

何トナレバ子宮空虚トナル者ハ患者ノ静脈全
 ク空虚トナルニ至ル迄、血・子宮内ニ聚積スベキ
 ヲ以テナリ、
 若シ夫レ右ノ諸法効ナキ者ハ、唯、子宮歛縮スレ
 バ出血ヲ防止スルニ最モ切ナルノ理ニ基キ宜
 ク他ノ療法ヲ需索スベシ、其故ハ子宮・舒暢スレ
 バ脈管大ニ開張シ、歛縮スレバ脈管實ニ壓縮ス
 ルヲ以テナリ、蓋シ子宮ノ歛縮ヲ催起スルニハ
 宜ク子宮ヲ空虚トナスベク、即、分娩ヲ起スベク
 レバナリ、

此目的ノ主意ハ羔膜液「リキニオル」ノ排除ナリ、而シテ其排除ハ子宮ノ歛縮全ク迅疾ナラザルニ
 二 麦奴ヲ用テ催進スルヲ得ベシ、
 分娩後ノ出血「ヘルモル」^{ヘルモル}「ゾヂ・アフトル」^{ゾヂ・アフトル}。〇此症ハ先^ツ子宮ノ機関不足スルヨリ生マベシ、而シテ實ニ余ガ即今既ニ出血ニ對シテ有力ノ預防ナリト定メタル歛縮ノ缺乏ヨリ之ヲ發スベシ、此ノ如キ症ニ於テハ子宮・腹中ニ在リテ大且柔軟ニ覺ユ、是恐クハ安全ナル子宮歛縮ノ缺乏ヨリ胎盤ヲ残留シ或ハ既ニ驅出シテ後、子宮舒暢ス

ルナリ、
 治法 何ノ症状ニ於ケルモ歛縮センガ為ニ子宮ヲ扱ヘテ之ヲ輕クニ扱カムニ腹被上ヨリ左手ヲ以テ密ニ拿^{ツカ}ミ、又腹部ニ冷水ヲ灌注スベシト雖モ、漸ヘズ之ヲ冷サズ、只急卒ノ衝動ヲ起ス為ノミニ之ヲナスベシ、又麦奴ニ焼酒ヲ和シ飲服セシム、然レモ此ノ如クシテ更ニ効驗ナキハ驚クテナク徐々ニ右手ヲ腔中ニ挿入シテ其不整面ニテ知ルヲ得ル子宮ノ出血部ヲ右手ノ拳ト腹外ニアル左手ノ間ニ壓定スベシ、此ノ

如クスレバ子宮大約右手ヲ腔外ニ驅出スル許
 ノ歛縮ヲ奮起スベシトス、然レハ患者甚シク衰
 憊シテ虚弱トナル者ニハ、宜ク謹慎シテ手ノ挿
 入ヲ行フヲ要スベシ、如何トナレバ手術ヨリ生
 ズル障碍及ビ些少ノ出血ハ專ラ病症ヲ轉ジテ
 惡性トナスニ適スレバナリ、是ヲ以テ此ノ如キ
 危険症ニ於テハ宜ク先ツ燒酒ト麦奴ノ適量ヲ与
 ヘテ脈状少ク奮起スルニ至ルヲ要須トスベシ、
 然レハ胎盤ノ一部子宮ニ附着シ、且ツ子宮ニ不整
 ナル痙攣状ノ歛縮、即チ沙漏様歛縮コホウラルグッシ

シテ兼タル出血アリ、蓋シ其附着ノ部ハ後硬固
 ニシテ軟骨状ナルヲ以テ徴知スベシ、此症ニ於
 テハ子宮ヲ揪ミ且ツ固定スルガタメ左手ヲ腹上
 ニ置キテ右手ノ指ヲ收束シ圓錐形トナシテ徐
 々ニ歛縮セル子宮内ニ入レ胎盤ヲ分裂スレバ
 大率子宮ノ歛縮ニテ手及ビ胎盤ヲ共ニ驅出シ
 テ全効ヲ收ムルナリ、
 出血ニ因リ身体ニ起ス所ノ機能「コン」ス「チ」
 へルクトオガフヘ、○出血劇甚ニシテ頭ヲ擡トガレバ
 昏倒シテ出血止ムト雖モ、腦ニ血ノ注流ヲ促ガ

スガタメ頭ヲ下ダシムレバ出血・留連スレハ昏倒
 =ハ至ルイナク搦代り起リテ殆ト死ニ瀕ス
 ベシ、此ノ如キ症ニ於テハ患者視瞻昏暗及ビ耳
 鳴スルヲ訴ヘ、屢呻吟シテ卧褥ヨリ兩臂ヲ突出
 シ、且躁擾ニ堪ヘザルハ大危険ニ属スベシ、
 治法 牛肉茶若クハ雞肉茶ニ少量ノ阿芙蓉ヲ
 加ヘタル燒酒ヲ兼用シ、且毫モ効應ナケレバ健
 全ナル他人ノ血ヲ瀉シテ輕々ニ患者ノ靜脈中
 ニ注入セシメテ要ス、
 今挽搦搦ビロルエシルベシラルコト○此症ハ劇甚ニシ

テ頻々顛瀾状ノ發作アリ、而シテ腦ノ劇シキ衝
 激及ビ不知覺ヲ兼テ全數ノ四分一殆ト死ニ至
 ルベシ
 原因 通常腹部ノ飽滿小便ノ量僅少ナルニ兼
 テ多血衝激ヲ催進スルノ光景ナリ、而シテ初産
 ノ者多産ノ者ヨリモ多クコレニ罹ル、
 前驅症 シムプロトムハ顔面及ビ四肢ノ浮腫小
 便僅小眩暈及ビ耳鳴屢發作ニ先ツテアリ、
 症候 最劇シキ顛瀾ノ發作ニ齊シク顔面腫脹
 シテ葡萄青色ヲ顯ハシ、顔面及ビ全身ニ搦搦ヲ發

シ口ニ泡沫ヲ露出シ、屢舌ヲ咬^ルテ甚シク、且呼吸
 困難ヲナス、此發作ヤ時トシテハ五分^ニ時ヨリ半
 小時ニ及ゼテ漸々輕快ニ就ケバ脈狀靜穩トナ
 リ、患者人莫^クヲ看ルニ至ル、然レモ多クハ必^ズ再
 發シテ其症更ニ劇甚トナル、而シテ其輕症ニ於
 テハ發作間ノ狀態只大衰弱ト精神錯乱トノミ
 ニテ或ハ甚シク眠ヲ嗜^ミ更ニ甚シキハ昏睡シ
 テ漸次ニ危險ニ進ムナリ、是如何トナレバ昏睡
 ハ次^ニグニ死ヲ以テスルモノナレバナリ、
 産婦ノ搖擗ハ或ハ分娩前或ハ分娩中或ハ分娩

後ニ發スベシ、而シテ其分娩前ニ發スル者ハ子
 宮ノ歛縮發作ト同時ニ起リテ太抵小兒死シテ
 生ルベシ、又分娩中ニ發スル者ハ殆^ド自然ノ順
 序ニ從ヒテ其發作疼痛ト同時ニシテ其疼痛總
 テ甚ダ苦楚ノ微ヲ具ス又分娩後ニ發スル者ハ
 通常神經系ニ得タル損傷ニ關係ス、
 治法 茲ニ行フ第一義ハ腦ニ血液ノ蓄積スル
 ヲ預防スルニ在リ、是ヲ以テ先^ニ靜脈ヲ刺開シテ
 血ヲ泻出シ而シテ後ニ項窩ニ吸角ヲ帖シテ脈
 弱及ヒ軟トナリ、瞳子全ク知覺ヲ得ルニ至^ルベシ、

此症ニ於テハ甚大ナル瀉血ニ堪ユ、又宜ク頭髮
ヲ剃リテ膠囊ニ氷冷水ヲ盛リ之ヲ其部ニ帖ス
マシ、其第二義ハ大小二便ノ許多ノ排泄ヲ促ス
ニ在リ、此目的ニ達スル藥ニシテ迅疾且有力ナ
ル者ハ吐酒石ニ若ハナシ、此藥ハ其量半匁ヲ溶
液トシテ半小時毎ニ与ヘ吐下ヲ起スニ至レハ
脈状ニ有利ナル効アルヲ擔認スルモ亦偉効
アルノ藥トナス、然レモ最初ニ良性ノ衝動灌腸
法ヲ施シ又疾ク甘黍、蘓、甘模、尼ノ某量ヲ与フル
モ亦大ニ得タリトス、而シテ膀胱ハ要須トセバ、

宜ク之ヲ空虚トナスベシ、
阿芙蓉ノ應用ニ至テハ甚夕議論多キ一変トナ
ス、若シ夫レ患者出血スル氏ニ之ヲ与ヘナバ只
其不幸ヲ催進スベキノミト云テ可ナリ、然レモ
發作留連シテ特ニ分娩ノ後加フルニ大刺衝及
ヒ大衰弱ヲ兼タル者ニハ宜ク適量ノ阿芙蓉ヲ
與フルヲ良トナスベシ、
若シ夫レ分娩ノ機ニ關係スルヤノ疑團アル
者ハ、分娩平易ニ完了シテ産道全ク舒暢スルニ
至ル迄ハ阿芙蓉ヲ用井ルヲ許サズ然レモ此

緊切ナル症状ノ詳細ナル告示ニ就テハ學者宜ク上文ニ引載セル醫官ナルチル及ヒリグビ
イニ家ノ著書ヲ参考スベシ、
産婦狂^{ラビエ}マエ^ル○産褥ニ閉居スル後暫時ニシテ精神錯乱ニ罹ルノ婦人アリ、此症ノ原因ハ通例腸胃ニ汚物アリテ刺戟スル者ナリ、或ハ精神ノ奮勵・出血・若クハ久シク哺乳セシムルニ因リ虚衰スル者アリ、
症候ニ太都餓多錯雜ノ言ヲ發シテ安靖ヲラズ全ク不眠ニシテ食機喪亡シ且鬱憂困敝ノ徴アリ

ル妄想ヲ發ス、
治法 患者興奮性ナリト雖モ刺絡ヲ行フテヲ許サズ、而シテ余必ズ學者ニ戒ム、宜ク慎テ狂性ノ興奮ヲ兼テ^テ描搦症ヲ真ノ産婦狂ト誤認スルトナカルベシト、其故如何トナレバ甲症ニハ刺絡緊要ニシテ乙症ニハ有害トナルヲ以テ也、其最^モ注意ヲ要スルノ處ハ分泌ト排泄トニ在リ、屢、舌甚シク苔ヲ帶ビテ汚穢ナルハ吐藥ヲ要須トナスト雖モ、太抵緩下藥ヲ以テ適當ノ良劑トナスベシ、小兒ハ之ヲ奪ヒ取リテ患者ハ居ヲ

産科

五三

千成

移シ閑静ナル田家ニ至ルヲ最良法トナス蓋シ
田家ニ住スルニ兼テ清楚ノ大氣ヲ得且、榮養シ
テ刺衝セザル食料ヲ用井及ビ看護適當スルハ
ハ太抵二三月中ニ其精神力ヲ回復スルヲ得
ベントス、

産婦熱^{「ヒ」}ル^{「ヒ」}ヒ^{「ヒ」}エ^{「ヒ」}グ^{「ヒ」}ル^{「ヒ」}ペ^{「ヒ」}ラ ○此恐懼スベキ病ハ時代
ニ從ヒ諸般ノ名義ヲ受ケタレトモ更ニ其標症ノ
顯著ナルヨリ産婦ノ腹膜^{「ヒ」}焮^{「ヒ」}衝^{「ヒ」}ト^{「ヒ」}合^{「ヒ」}併^{「ヒ」}
等ト命ズ蓋シ其實體ハ腎官ヘルガソシ^{「ヒ」}ノ查點
ニ因リテ大ニ證據ヲ得タルガ如ク一種ノ血病

「ブ」ル^{「ヒ」}「ド」^{「ヒ」}「ダ」^{「ヒ」}ナリ、而シテ通常局部ノ焮衝ト合併
スト雖モ畢竟純性熱病^{「ヒ」}ト^{「ヒ」}ブ^{「ヒ」}ル^{「ヒ」}「ヒ」^{「ヒ」}ナリ、

此症四種アリ、
第一種ハ最普通ナル症ニシテ先、戰慄ヲ發シ
テ腹中ニ疼痛ヲ起シ、且、腹部鋭敏ナルヲ以テ之
ヲ知ル、此症其始屢、下藥ヲ過量ニ服スルニ因リ
發スルヲ明白ナリ、是ヲ以テ托^{「ヒ」}歇^{「ヒ」}ル^{「ヒ」}散^{「ヒ」}ヲ^{「ヒ」}用^{「ヒ」}井兼
テ腹部ニ大ナル糠^{「ヒ」}粉^{「ヒ」}糊^{「ヒ」}劑^{「ヒ」}ヲ^{「ヒ」}施^{「ヒ」}セ^{「ヒ」}バ^{「ヒ」}大^{「ヒ」}概^{「ヒ」}寛^{「ヒ」}解^{「ヒ」}ス
ベシ、若シ夫レ効ヲ得ルナキ者ハ、宜ク水蛭ヲ
帖シ、刺絡ヲ行ヒ甘^{「ヒ」}汞^{「ヒ」}ニ^{「ヒ」}阿^{「ヒ」}笑^{「ヒ」}蓉^{「ヒ」}ヲ^{「ヒ」}加^{「ヒ」}入^{「ヒ」}用^{「ヒ」}井、且、腹

膜焮衝ニ効アル他ノ諸藥ヲ用フベシ
 第二種ハ輕症タイフスノ徵ヲ具シ腸中刺衝ノ
 侯ヲ兼ヌ、而シテ先^ツ疆直ヲ發シ、尋テ發熱嘔吐下
 利ヲ發シ、最^モ惡臭ナル汚物ヲ漏泄ス、醫官ヘルカ
 ソシ曰ク、此症ニ於テハ舌其始、苔ヲ帶ビテ白ク
 速ニ慢性痢病ヲ患ル者ノ舌ノ如ク紅キ一常ニ
 反シ皮膚乾燥シテ熱灼シ、且、暗黄色^ルダロス^キヒ^イイ^ト
 トナリ精神全ク謔妄セズト雖モ、靜定セズ、衰弱
 甚シクシテ四肢顫振シ、又其^{アル}症狀ニ於テハ右ノ
 諸症ニ嗣^テテ其要器ノ急性焮衝或ハ關節ノ焮衝

子宮ノ軟化其水脈若クハ靜脈等ノ化膿ヲ繼發
 スト、此症ヲ療スルノ最良法ハ温湯ノ灌腸法ヲ
 量多ニ行ヒ蓖麻油ヲ内服セシメテ腹内ヲ悉ク
 清滌シ、体質ノ強弱ニ準シテ刺絡或ハ蟻針法ヲ
 施シ、銀灰散及ヒ托歇尔散ノ少量ヲ用井腹肚ニ
 冷罨法ヲ行ヒ、輕性ノ滋養品ヲ用ルニ在リ、而シ
 テ收斂及ヒ鎮痙ノ注射藥ハ此症ノ下利ニテ虚
 衰スル者ニ適當スヘシトス、
 第三種ハ專ラ神経系ニ患害ヲナスト見ユル熱
 症ナリ、大謔妄、騷擾及ヒ瀕死ノ症ニ
 志性ノ

五十五

五十五

五十五

嗜眠及ヒ昏倒ニ罹リ、且他ノ三種ニハ亦併發ス、
 而シテ其治法ハ專ラ甘和ノ方法ニ在リ、
 第四種ハ病毒ノ機能ヲ血ニ因リテ全身ニ分布
 スル確證アリ、且惡性猩紅熱「スカルラチト殆ト
 同一ナルヲ指斥スル惡性熱ナリ、其始、戰慄及ヒ
 腹痛アリテ直ニ虚衰ニ至リ、脈疾、玻璃ノ如キ眼
 及ヒ暗黒ノ皮膚ヲ現示ス、此症ニハ又屢、胸痛惡
 寒、呼吸困難及ヒ其他肺焮衝ノ諸徴ヲ兼テ死後
 之ヲ開觀スルニ肺臟壞疽状ヲナシ、胸膜ニハ屢
 液ヲ充盈スルヲ見ル、而シテ關節及ヒ窠状織理

ノ膿瘍、靜脈焮衝、腸壞疽、膿眼ハ惡症中ノ最惡性
 ナル者ナリ、蓋シ窠状織理ノ膿瘍ハ焮衝性火丹
「アレグモノウス」即チ散漫性、窠焮衝ヨリ起レルナ
「エリシペラス」ルヘシ、治法ハ殆ト失望ナリト雖モ其主治ハ強
 健保固シ諸症ヲ輕快スルニ在リ、
 原病「パト」○某著者ハ此熱病ヲ局部ノ焮衝症
 ニ關係スルトシテ諸症ノ差異ヲ申明セント企
 テタリ、例スルニ急性焮衝状熱ハ腹膜ノ焮衝ヨ
 リ起リ、虚弱様熱「ロウタイホル」ハ子宮ノ靜脈或
 ハ水脈等ノ焮衝ヨリ生スト云カ如シ、
 此

説ハ原因ト錯雜スル傍流ノ論ナリ
 輒近ノ查點ニ從ヘハ産婦熱ハ殆ト腐敗スル動
 物分産婦ノ体ト抵觸スレハ呼吸氣ヨリ之ヲ吸
 入スルモ又腔中ヨリ誘引スルモ皆發スヘキ
 ヲ指斥シタリ、是ヲ以テ甲婦乙婦ノ産婦熱ヲ患
 フル者全室ニ住スレハ必ス其熱ニ汚染スル
 切實ナリ、故ニ醫者一婦人ノ此症ニ罹リテ惡性
 ナルヲ驗セハ其醫他ノ婦人ニ同ク其症ヲ傳染
 スト思フ一切實ナルヘシ、其他醫者若シ死後ノ
 検査ヲナシ或ハ腐敗液ヲ漏泄スル創傷ニ繃帶

ヲ施セシ片ハ其醫モ亦傳染毒ヲ搬運スル一切
 實ナルベシ、又産婦熱ヲ起スベキハ火丹ヨリ甚
 シキ者曾テ之アルトナシ、實ニ此二病ハ相親和
 スル病ナルト顯然ナレバ若シ病院ニ於テ産母
 甲病ノ為ニ死スル片ハ小兒屢乙病ノ為ニ死ス、
 而シテ醫者産婦ヲ解剖スル時ニ受タル創ヨリ
 惡性ノ火丹ヲ生ズト云説ハ各位大家先生ノ甚
 ダ好ク明察スル所トナス、是ヲ以テ醫者タルモ
 ノハ宜ク己ガ倚托ヲ受タル患者外ニ此恐ルベ
 キ傳染病ノ搬運者タルト避ク
 幸
 竟變

産科寶鑑

幸

竟變

通ト仁心トノ占趣ニ基ツク所ナリ

産科寶函終



發兌

書肆

東京大傳馬町三丁目	袋屋 龜治郎
全 銀座三丁目	山城屋 政吉
全 馬喰町	島屋 利助
全 芝神明前	和泉屋 市兵衛
大坂新齊橋大寶町	敦賀屋 九兵衛
甲府八日町	藤屋 傳右衛門
全 魚町	村田屋 孝太郎
静岡七軒町	須原屋 善藏
尾州名古屋本町	萬屋 東平
駿州沼津上土町	板

